

ミカ書6章8節 「主の要求される事」

1A いけにえに優るもの 6-7

1B 什一の捧げ物 マタイ 23

2B 主の御声 1サムエル 15

2A 公義を行なう

1B 神と隣人への愛

2B 供え物の前の和解 マタイ 5

3A 憐れみを愛する

1B 必要を知る ダビデの供え物

2B 罪の赦し 借金の帳消し

4A へりくだって歩む

1B 主に会う

2B 日々の慈しみ 哀歌

3B 慎み深さ

5A 完全なもの

1B イエスを主として生きる

2B 聖霊の力

本文

私たちの聖書通読の学びは、ミカ書に入っています。先週は前半、1章から4章までを読みまし
た。今日は午後に5-7章を一節ずつ読みます、そこはキリストの預言があり、またミカがイスラ
エルを代表して罪の告白をし、罪の赦しを得るという内容です。そして聖餐式を行ないます、ぜひ参
加してください。今朝は、6章8節に注目します。「**主はあなたに告げられた。人よ。何が良いこと
なのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりく
だってあなたの神とともに歩むことではないか。**」

6章は、主ご自身がイスラエルの民を法廷の場に連れて行っている設定になっています。主が
彼らに訴え、彼らも弁明をして、そして再び主が訴えているというような設定です。こうやって、物
事をはっきりとさせて、彼らが自分たちの行なっていることを正すように促しておられます。初めに、
主ご自身が、「わたしが、あなたがたが躓かせるようなことを行なったのか？何かあなたが、わた
しについて来れなくさせるようなことを、したのだろうか？」というような問いかけをしておられます。
けれども、主は彼らに良いことはしても、何ら悪いことをしておられません。彼らがただ、主に拠り
頼み、付いていくことができるような配慮しか見当たりません。

けれども民は、反論します。6節と7節ですが、読んでみます。「6 私は何をもって主の前に進み行き、いと高き神の前にひれ伏そうか。全焼のいけにえ、一歳の子牛をもって御前に進み行くべきだろうか。7 主は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の犯したそむきの罪のために、私の長子をささげるべきだろうか。私のたましいの罪のために、私に生まれた子をささげるべきだろうか。」主の前に出るということが、何でこんなに大変なのか？と神に問い質しています。全焼のいけにえ、一歳の子牛なのか？さらに、幾千の雄羊、幾万の油なのか？さらにもっと大きな犠牲、自分の長子を捧げるべきなのだろうか？と言っているのです。主が要求しているものは、その犠牲はあまりにも大きいと言っています。

このことに対して、主は明確に答えておられます。それが今、読んだところで、「**主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。**」何が良いことか、何を要求しておられるのか？実は、そのようないけにえではなく、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだって神と共に歩むことなのだ、と言っています。このシンプルな生活、主が求めておられることをただ、行なっていく生活について学んでいきたいと思えます。

1A いけにえに優るもの 6-7

私が、夫婦の生活の中で、しばしば失敗することがあります。それは、「これだけのことをしてあげているのに。」という思いが出て来るのですが、後になって「ただ、これだけのことをしてくれればよかったのに、それをしてくれるまで二年もかかったわよ。」とか、言われることです。簡単な例であれば、夫婦の会話です。男はその内容を聞いて、それを解決しようとしてしまいます。だから、話が説教調になります。それで、たくさん話せば話すほど、彼女は不満足です。「これだけ、誠意をもって話しを聞いてあげているのに。」と私も不満が溜まります。けれども、実はただ話を聞いてほしかっただけ、ということなのです。これに気づくのに時間がかかります。私が、自分を妻に捧げていると思えば思うほど、それが独りよがりの思いであることが気づいていません。相手あつての誠意ですね。後で詳しく説明しますが、これが「公義を行なう」ことに関わります。神との関係、人との関係を正しくする、そのバランスや公平な位置をしっかりと保っていることなのですが、それなくして、やみくもに犠牲を払ったところで、それは正しいことにならないし、愛していることになりません。善意が身勝手な行為になることがしばしばあるのです。

1B 什一の捧げ物 マタイ 23

こうした夫婦の関係の中で起こる同じことが、神との関係にも起こります。主が願われていること、求めておられることを見失って、犠牲だけを払っていく姿勢です。しかも、それが、神が命じておられることだと勘違いして、自分自身をも欺くことです。イエス様が、おそらくミカの預言を意識して、パリサイ人、律法学者に対して「忌まわしいものよ」と言われました。「マタイ 23:23 忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一

を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、すなわち正義もあわれみも誠実もおろそかにしているのです。これこそしなければならぬことです。ただし、他のほうもおろそかにしてはいけません。」ここで、「正義もあわれみも誠実」というところが、ミカの「公義」「誠実」そして「へりくだり」と重なっています

聖書には、主がイスラエルをエジプトから脱出させ、彼らを贖われた働きを行われました。そしてイスラエルは、エジプトの奴隷ではなく、主の所有の民となりました。そこで主は、彼らが主によってすべて備えられ、守られ、養われている中で、彼ら自身が主を礼拝するために、自分の収穫の十分の一を捧げなさいと命じられていました。イエス様が、「他のほうもおろそかにしてはいけません。」と言われたように、十分の一の捧げ物自体が間違っているのではなく、それは大事にすべきであります。キリスト教会の中で、これは旧約の律法であり新約では命じられていないのだから、収入の十分の一の献金は考えなくてよいと教える人たちもいます。けれども、イエス様はおろそかにしてはいけないと言われているのですから、私たちは主を神として礼拝していく中で、自分の収入の十分の一を主にお返しするという什一献金の原則を尊びます。

けれども、「はっか、いのんど、クミンまで」十分の一としておさめているとしています。自分の家にある香辛料まで、そこから十分の一を収めようとしています。こうやって律法を重くしていきます。主が命じていることではないことは明白なのに、勝手にそこに自分の教えを付け加えて行きます。こうやって、自分は、これこれのことをすることはできないとして、主の教えを自ら重くしていくのです。そして、自分自身が本当に取り組まなければいけない問題を、自分のプライドがあるのでそこは避けて通ろうとします。同じように、「私は教会に、週に一回来ている、時々来ているから大丈夫。」として、自分が捧げていることで満足していたら、同じ過ちを犯しています。

例えば、分かり易く伝えるのであれば、「自分がこれまで神に背を向けてきたこと、その罪を悔い改めて、イエスを自分の主として信じ、受け入れてください。」と言いますと、なぜか、「聖書はまだ全部読んだことがないですし、受け入れられないのです。」と言います。聖書を全て読まなければ、キリスト者になることはできないなど、一言も神は言われていないのです！ただ罪を悔い改めて、信じてくださいと言っているだけなのです。その「自分の罪を認めて、そこから離れて、イエスを主とする」という命令が、自分のプライドがあって受け入れられなくて、他のことをして救われようとしているだけです。これは一例であり、私たちは神の命令に、従わない代わりに、数々の掟を自分で作り上げて、それを守ろうとして、本当は守らなければいけないこものを守らないことが多いのです。

2B 主の御声 1サムエル 15

イスラエルの王サウルが、その象徴的な過ちを犯しました。アマレク人を聖絶しなさい、男も女も、子供も、牛も羊も、ろばもらくだも殺せという神の言葉を、サウルはサムエルから聞きました。そし

てアマレク人を殺しますが、自分の手柄がほしくて敢えて、その王アガグを生け捕りにしました。そして家畜を殺すのが惜しくて、それで上等な牛、羊だけは残して、他は殺しました。そしていけにえを捧げています。そして、やってきたサムエルに対して、「私は主の命令を守りました」と言ったのです。しかし、明らかに主の命令に従っていません。むしろ、いけにえを捧げることによって、あたかも自分が霊的であるかのように、神の命令に従っているように見せかけているだけです。キリスト者にとって、偽善は私たちの毒をもたらします。実際はそうではないのに、あたかも自分が神に近づいていると見せかけることです。預言者サムエルは言いました、「主は主の御声に聞き従うほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。(1サムエル 15:22)」

2A 公義を行なう

そこでミカは、主にとって何が良いことか、求めておられることは何なのかを述べています、「**ただ公義を行な**」うことだ、ということです。公義はこの前お話ししましたが、「裁く」というのが元々の意味です。けれども、正しく治めるという意味合いがあり、国の指導者であれば正しく統治するということであり、個々人であれば、正しく自分の生活を治めていく、管理していくということです。

1B 神と隣人への愛

ですから、公義を行なうということは、神に対しても、人に対しても、正しく接していくということです。私たちが商売をしていたとしたら、誤魔化すことなく、正しい量りをもって物を売るのと同じように、神との関係において、人との関係において、健全で、まっすぐで、バランスの取れた、公正な見方をしていくということでもあります。「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり、預言者です。(マタイ 7:12)」と主は言われました。そして有名な御言葉がありますね、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という戒めです。神に対しての関係が崩れると、必ず人に対しても関係が崩れます。人をないがしろにしたら神をないがしろにしているし、神をないがしろにしている、人との関係を大切にすることはできません。二つの戒めは、一つにまとまっています。

2B 供え物の前の和解 マタイ 5

イエス様は、そこで次のような戒めを与えておられます。「マタイ 5:23-24 だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。」主の前にいけにえを捧げようとしている時に、兄弟に恨まれていることを思い出したら、まず仲直りしなさいということです。主への礼拝と、兄弟との和解が密接につながっているということです。

けれども、「いろいろな人との関係があるのに、その人たちと全て良い関係でいることは不可能だ」と思われると思います。はい、その通りです。決して、全ての人と平和な関係でいることが必ずしも御心ではありません。八方美人になることが、御心ではありません。イエス様は、律法学者やパリサイ人と深い確執にありましたが、パウロは一部のユダヤ人から命を狙われていました。パウロも、「自分に限る限り、すべての人と平和を保ちなさい。(ローマ 12:18)」と言っていて、自分のほうから平和を乱すようなことをしてはいけないと言っているのであり、相手がゆえもなく敵意を抱くことについては、これは仕方がないことです。けれども、平和を求めるとすれば、私たちは人に注目する以上に、主の御霊に満たされることです。そして、聖霊の下さる知恵に満たされることです。

3A 憐れみを愛する

そして次に、ミカは、「**誠実を愛し**」と言っています。これはヘセド、つまり恵みとも訳せるし、真実な愛と訳しても良いでしょう。主が人に対して抱いておられる、限りない愛、真実であります。そこには、正しさの基準からすると矛盾していることがあるかもしれない。決して神の正しさは妥協することはありませんが、神の忍耐と憐れみの中において、弱き、罪深き存在に付き合ってくださいの部分があります。預言者ヨナが、「四十日で、ニネベが滅びる。」と宣言したのに、必死になって悪から立ち返ろうとしていたニネベの人々を見て、主は滅ぼすことを思い直されました。滅びると宣言したのに、なぜ滅ぼさないのか！とヨナは怒りましたが、彼は同時に、主は情け深く、怒るに遅い方であることも知っていました。

1B 必要を知る ダビデの供え物

安息日で弟子たちがひもじくなって、穂を摘んで食べた時のことを思い出します。パリサイ人たちがそれを見て、安息日にしてはならないことをしていると咎めました。イエス様は、ダビデのことを話されました。彼は、サウルの手から逃げて、命からがら祭司たちのところに行きました。ひもじかったのです。そこで、幕屋の中には、祭司たちだけが食べることのできる供えのパンしかありませんでした。けれども、祭司はそれをダビデにそれを与え、ダビデと共に行動していた者はそれを食べたのです。イエス様は、ホセアの預言から、「わたしはあわれみを好むが、いけにえは好まない。(マタイ 12:7)」という言葉が引用されています。

2B 罪の赦し 借金の帳消し

このような、人々の基本的必要を知ることだけでなく、人を赦すこともあります。イエス様は、「あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。(マタイ 5:7)」と言われました。私たちは、自分自身に対しては憐れみを欲します。けれども他者に対して、憐むことがなかなかできません。その二重の測りを持っています。そして、譬えも語られました。一万タラントの借りのある僕がいましたが、帳消しにしてもらいました。一タラントは、実に6千日分の労賃に値しますから、6000万日、すなわち16万4千年ぐらいに相当する金額の借金です。文字通り天文学的な

借金です。これを帳消しにしてもらいますが、彼は仲間の僕に百デナリを貸していました。100 日分の労賃に値する金額です。ところが彼は帳消しにせず、赦しませんでした。それで、他の仲間たちは非常に心を痛めて、このことを主人に報告しましたが、主人は、借金を全部返すまで、獄吏に引き渡したとあります。私たちが、ある人が赦せないという思いが出てきたら、その数千倍、数万倍の自分自身の罪を、神から赦されて、それで今を生きていると思って構いません。キリスト者であるということは、憐れむ人、罪を赦す人、愛する人ということでもあります。

4A へりくだって歩む

そして、「**へりくだってあなたの神とともに歩む**」と主は語られます。

1B 主に出会う

主にあるへりくだりとは、何でしょうか？それは、自分を卑しめることではありません。日本ではまずもって、「あなたは駄目だ」という教育を受けてきました。だから、自分を卑しめることがそのままへりくだりであり、大胆になること、自信を持つことは高慢であると教えられてきました。そのために、愛ではなく、恐れによって相手を気づかいます。これは自分が守られるための手段であって、神から見ればそれもまた高ぶりでもあります。

へりくだるとは、「主の前にいて、そのままのこと」と言い換えることができるでしょう。自分で自己評価をするのではなく、主のところにおいて、隠し立てをせず、そのままの自分を受け入れることです。主の前で出ている数多くの聖徒たちは、そこで真実なへりくだりを経験しました。旧約の聖徒たちは、主の使いを見て、神を見てしまった、私は災いだと叫びました。例えばイザヤは、「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。(イザヤ 6:5)」と言いました。モーセは、地上で最も謙遜であったと言っていますが、彼は、燃える柴におられる主を見て、下を向いて、履物を脱いで、そこで主を礼拝しました。人の前に出ても、彼はそのままの姿で人々に接しました。モーセが今、ここにいたとしたら、たぶん、普通に人として私たちに接してくれることでしょう。あれだけ、偉大な力、奇跡や不思議を行なうことができても、自分に特別な力があるなど、いささかも見せなかったことでしょう。ダニエルも、主の使いを見て倒れてしまいました。ペテロも、湖において大漁になってから、主の前で、「私は罪人です、私から離れてください。」と言いました。主に出会うこと、そのものが私たちに真実なへりくだりを与えます。

2B 日々の慈しみ 哀歌

そして、日々、朝毎に主の慈しみを知ることは、へりくだりを与えます。「哀歌 3:22-24 私たちが滅びうせなかつたのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実力は強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。」朝毎に、祈っていますでしょうか？主の言葉を聞いて、主から聞いているでしょ

うか？そこには、新たな慈しみが注がれています。自分は滅ぶべき存在なのに、それでも生かされているという慈しみを知ります。全てのことは、神から来ていることを知ります。そこに、へりくだりが生まれます。それがないと、あたかも自分自身が生活を管理しているのだと誤ってしまいます。そして神さまについては、付け足しです。余暇があれば、神さまのところに行きましようとなるのです。その時は主役は神ではなく、自分になっています。主が主であるためには、日々、その慈しみを味わう必要があります。

3B 慎み深さ

そして、神の恵みを知って、そこに留まるところに、慎み深さが生まれます。「ローマ 12:3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」主から与えられた恵みがあります。信じて、神の恵みを知っています。自分はただ、救われただけにしか過ぎない、神の恵みを受けていると知っています。そこには、自分が何かできるか、できないかという世界、領域はありません。ただ主が、自分を立てておられることしかありません。ですから、思うべき限度を超えて何かをするのではなく、信仰の量りにしたがって慎み深い考え方をしないとはいけません。私たちは、真理を知ると、それで全てを知っているかのように錯覚します。けれども、実はその真理は自分のものとなって、自分の行ないにも現れ、自然にその真理の中に生きているところで、確かに真理を知っていることが証明されます。使徒ヨハネがガイオに手紙を書きましたが、「兄弟たちがやって来ては、あなたが真理に歩んでいるその真実を証言してくれるので、私は非常に喜んでいます。(3ヨハネ 3)」と語っています。その歩みの中に真理を知っているのかどうか、示されるのです。

5A 完全なもの

こうやって、多くのいけにえではなく、ただ公義を行ない、誠実を愛して、神と共にへりくだって歩むことを主は教えられました。もしかしたら、「私は、そんなに犠牲を払っていないから、大きな問題はない」と思っているかもしれません。「無理をせず、そこそこにイエス様を信じてればいいんじゃないですか？」と言われるかもしれません。しかし、ローマ 12 章でパウロは、「神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。(ローマ 12:2)」と言いました。何が良いことで、何が完全であるかをわきまえ知りなさいと言っています。

1B イエスを主として生きる

イエス様は、「あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。(マタイ 5:48)」と言われました。そこそこにイエス様に従っていればよいのだということは、主との歩みの中で決してありません。完全でありなさい、と言われていました。パウロは、完全なものをわきまえ知りなさいと言われていました。イエス様を主とすることは、絶えず完全なものに触れているということです。主ご自身

が完全な方です。私たちは絶えず、自分の至らなさ、欠けたところを知らされます。それがもしないのであれば、イエス様に出会っていないこととなります。イエス様はアクセサリー、付属品かもしれませんが、自分を支える命、自分の歩む道にはなっていないということです。

2B 聖霊の力

完全な方に会っていくということは、こうやってへりくだりを迫られます。そして、自分自身ではなく、主ご自身が自分の内に生きておられることを知ります。自分は十字架に付けられているのです。自分を愛して、死んでくださったキリストが生きているからこそ、自分も今、生きていることを知ります。ここに聖霊の力があります。イエスを信じて生きるとは、イエス様に生きていただき、自分の力ではなく、聖霊の力、聖霊の助けによって生きることです。